

図書だより

<第46号>
平成19年2月1日
呉工業高等専門学校
図書委員会



「竹原市町並み保存地区」

目 次

【巻頭文】			
「図書館整備の抱負について」	図書館長	岡本 二郎	2
【第3回校内読書感想文コンクール優秀賞】			
『4TEEN』（石田衣良著）を読んで	A 1	木村 友香	3
『博士の愛した数式』（小川洋子著）を読んで	E 2	村川 将弥	4
『こんな夜更けにバナナかよ』（渡辺一史著）を読んで	A 3	砂野 萌	4
『進化する紙メディア』（赤羽紀久生著）を読んで	M 5	菅原 喬史	5
【留学生が紹介する外国の図書館】			
「私の国の図書館を紹介します」	C 3	トゥラシット トウン	6
【ブックハンティング】			
「ブックハンティングについて」	文化委員長	A 4 出口 美里	6
【新任教職員の随想（1）】			
「『伝記』を読んでみよう」	一般科目（社会）	奥平 理	7
「本を読んでいますか？」	一般科目（物理）	笠井 聖二	7
「苦手だった読書」	機械工学科	林 和彦	8
「読書の勧め」	電気情報工学科	山田 正史	8
【在外研究員報告】			
「外国の図書館紹介」	電気情報工学科	井上 浩孝	9
【新任教職員の随想（2）】			
「40年前の高専時代の読書」	建築学科	寺岡 勝	10
「読書のすすめ」	建築学科	西宮 善幸	10
「充実した図書館ライフを」	建築学科	大和 義昭	11
【行事報告】			
第4回呉高専文化セミナー	図書館長補	新美 哲彦	11
【お知らせ】			12
1 平成17年度 図書館利用状況			
2 学年末休業中の長期貸出について			
3 新コーナーの設置について			
【編集後記】	図書館長補	堀口 至	12

巻 頭 文

図書館整備の 抱負について

図書館長

岡 本 二 郎



最初に、本年度4月からこれまでに図書委員会が計画し、行ってきた主な事業内容について報告を兼ねて振り返ってみます。その後、今後の図書館整備についての私の抱負を述べます。

まず、主な行事ですが、6月17日（土）に大和ミュージアムで「呉高専文化セミナー」を開催しました。講師は本校の宇根俊範先生で、テーマは「音楽で語る歴史」でした。内容が音楽と関連させて歴史を講演して頂きました。参加者が定員70名を超えるほどの盛況で、成功裏に終わることが出来ました。7月28日（金）の午後に、学生会文化委員会の協力を得て、「フタバ図書テラ」で学生約20名を引率し、ブックハンティングを行いました。この企画は今回で3回目となり、図書館行事として定着してきているように感じました。夏の学校見学会では、図書館展示では、異文化展示、稀書展示、本校教職員著書展示を主な企画として展示を行いました。その際に展示物を提供して頂いた教職員の方々に、紙面を借りてお礼を申し上げます。それから例年通り、研究報告の発行を行っています。研究報告に関する著作権について、規則の改正案を作成し、提出しております。今後の事業としては「図書だより46号」の発行が残っています。この件については現在、図書係を中心に、後期末に発行できるように編集作業を進めております（文化セミナーとブックハンティングの内容については、本号に報告を載せておりますのでご覧下さい）。

本年度、シラバス掲載図書コーナー及び、本校教職員の執筆図書コーナーを設置することになりました。これらのコーナーは図書閲覧室中央にあ

りますので、大いに利用してください。さらに、英語科の先生方に協力を得て、新TOEIC 対応の図書に更新しております。来年度の TOEIC 試験に向け、大いに役立て下さい。

今後の図書館の使命として、従来の業務に加え、文献検索などの情報提供サービスの要求が増加に伴い、その対応が求められることが予想されます。この点に関しては図書委員会及び図書館スタッフと相談しながら、出来ることから実施していきたいと考えております。手始めにJDream IIの講習会を1月23日に実施いたします。

以上が本年度の図書委員会及び図書館の主な行事に関しての報告ですが、その他に私自身は、10月に岡山市で開催された「第92回全国図書館大会」や、11月に松江高専で開催された「中国四国地区高等専門学校図書館長会議」に参加し、図書館運営に関する講演の聴講、及び図書館運営や業務に携わる方々と意見交換や交流によって大きな刺激を受けてまいりました。こうした経験を今後の呉高専の図書館運営に活かしたいと思います。

つぎに図書館の施設整備についての私見及び抱負を述べます。今後、図書館がもつ役割及び使命を鑑みると、図書館施設の拡充・整備が欠かせません。そのためには、①図書閲覧室の拡充、②DVD 及びパソコン室の新設、③書庫の増設、④開架書架の増設、⑤個人学習室の新設が課題と考えています。

これらの実現のためには、学内の理解と協力が必要です。幸い、本年度から学内に施設整備WGが発足され、図書館の施設整備の充実について意見を述べる機会を得られたことは幸いです。

今後とも図書委員会としては、図書係の方々とともに学生の学習向上、教職員の研究活動に役立てるような図書館を目指していきたいと考えております。



第3回校内読書感想文コンクール優秀賞

4TEEN(第129回直木賞)

石田 衣良 著

建築学科1年
木村 友香



私は「友情」というものが何なのかわからなくなる時がある。私は昔から、人の顔色を伺うような子どもだった。友達が機嫌を損ねないように、自分が嫌なことでも嫌とはいえず、言うとおりにしてしまう面もあった。たとえば、友達に「宿題をやってほしい」と頼まれたら、断れずにやってしまうというところだ。こんな友達に逆らえない自分が情けなく思った。というか、こんな人を友達と呼んでいいのかとさえ迷っていた。『4TEEN』は、そんな私に「真の友情」がどのようなものかを教えてくれた。

この物語は、全体的に身体が大きなダイ、クラス一の秀才のジュン、ウェルナー症候群という、普通の三倍の速さで年を取ってしまう病気のナオト、そして何もかもが平均的でどこにでもいる普通の中学生テツローの中学二年生の同級生四人組が、友情、恋、性、暴力、病気、死の六つのテーマと向き合い、出会ったすべての人々を受け止め、成長していく青春ストーリーである。

私は、この物語を読んで、「友情」について二つ、主人公たちに感心させられたことがある。

まず一つは、差別をしないということだ。物語中に出てくるカズヤは同性愛者だった。そのカズヤが、クラスみんなの前で、そのことをカミングアウトした場面があった。そんなときでも、四人はカズヤを受け入れ、自分のグループの仲間に入れてやった。

私は単純にすごいと思った。私の身近な人の中に同性愛者はいなかったが、障害を持った人ならいた。小学生低学年のときは、私も四人のようにその人を受け入れていた。しかし、時が経つにつれ、私はその人のことを受け入れられなくなった。どうやら、私はその人のことを、知らず知らずのうちに差別していたようだ。今でも、その人のように障害のある人を見ると、避けてしまうことが多い。

同じ人間なのだから、差別してはいけないと頭で思っている、実際それを行動に移すのは難しいことだ。だから、カズヤのことを受け入れた四人のことはすごいと思うし、見習わなければなら

ないと思った。

もう一つ感心したことは、病気の友達をしっかり支えていることである。

四人の中の一人は、ウェルナー症候群という病気を患っている。それがナオトだ。初めの方にも書いたが、この病気は普通の人の三倍の速さで年を取ってしまう。だから、この病気にかかった人の寿命は、大体三十歳くらいだという。そうすると、十四歳のナオトはもう人生の半分を生きたことになる。そんな残りわずかな命を懸命に生きている友達に対し、ダイ、ジュン、テツローは、思いもよらないびっくりプレゼントを用意したりする。

すごく友達思いの三人だと思った。私の周りにはその病気を患った人はいないので実感が湧かないが、もしそういう人がいたら、と想像してみた。私はその人のことを支えていけるだろうか。この三人のように、その人に普通に接することができるだろうか。いろいろ考えてみたが、今の自分にはできないと思った。障害のある人でさえ避けてしまう私が、普通の三倍の速さで年を取ってしまう病気の人に会っても、どうすることもできないのは目に見えている。だから、この三人のようになりたいと強く思った。しかし、この三人も、ナオトが自分の友達で仲間だったからこそ、普通に接することができたのではないかと、とも思う。どちらにせよ、私は人を差別してしまう面があるので、これからは三人のようにどんな人でも受け入れてみようと思う。

『4TEEN』は、友情についていろいろなことを考えさせてくれた。そして、私は本物の友情を見つけ出した。「真の友情」とは、互いを認め、理解し、支え合うことだと、この本は教えてくれた。

貸出図書ベスト10 (平成18年度上半期)

順位	書名
1位	大学編入試験問題 数学/徹底演習
2位	ハリー・ポッターと謎のプリンス
2位	ダ・ヴィンチ・コード
4位	TOEIC テストトレーニングブック
5位	はじめての TOEIC Bridge テスト & 実戦トレーニング
6位	GOTH (ゴス)
7位	詳解物理学演習
8位	TOEIC Bridge 公式ガイド & 問題集
9位	ブレイブ・ストーリー
10位	東京タワー：オカンとボクと、時々、オトン

博士の愛した数式

小川 洋子 著

電気情報工学科 2年

村川 将 弥



ぴったり八十分しか記憶がもたない。それは想像しただけで自分も周りの人間も辛い事だと思う。

ストーリーは、ある事故で記憶が八十分しかもたなくなってしまう数学博士、その数学博士の家政婦である主人公、その息子の $\sqrt{\quad}$ （ルート）が織りなす日々が描かれている。

主人公は博士の家に家政婦として派遣されるのだが、次の日に家に行ったときにはもう忘れられてしまっていて初対面の挨拶から始まる。そして数学者らしく「君の靴のサイズはいくらかね？」と数字についての一見おかしな質問をする。「24 cmです」と答えると、「実に潔い数字だ。4の階乗だ。」こんなやりとりがたくさんこの作品には散りばめられていた。

そして博士は忘れたくないことをメモに書いて自分の背広にクリップで留めて、忘れないようにしていた。

もう一つこの物語で関わってくる重要なものは阪神タイガースの江夏豊投手だ。博士は江夏豊が大好きで野球カードも大量にあつめていた。しかし彼の中の江夏豊は、彼が事故にあう前の江夏豊のままで、彼の中で江夏豊はまだ現役の投手だった。そんな江夏豊の背番号は28。『自身を除く正の約数の和が自身となる数』完全数。

博士は子供が好きでルートを見るといつも頭をなでてルートが少しでもけがをすると、血相をかえて近づき、泣きながら心配をした。

そんな博士の八十分の時間もあるときから少しづつ短くなってゆき…

思わず、電卓・紙・シャーペンを持って読んだ本だった。この物語にはかなりの数式が登場しているにもかかわらず、少しも堅苦しさを感ぜず、とても興味深く楽しめた。

ストーリーの内容の方はとても温かく人間がもっている本当の優しさを感じることができた。博士の記憶は八十分しかもたないから次に会った日には他人になっている。そして初対面の決まり文句、誕生日、靴のサイズなどを何度きかれても嫌な顔一つせず答えてあげる。博士の中では江夏豊は現役の名ピッチャーなのだから、今も現役でいるように話を合わせる主人公と $\sqrt{\quad}$ 。など、こんな優しさがまっすぐに伝わってきて、ちょっと優しすぎるんじゃないかという感じまでした。でも同時に、これが人間の本当の優しさなんだと感じた。

最後のシーン、大人になった $\sqrt{\quad}$ が、もうかなり年老いた博士とのキャッチボール。とてもやわら

かい情景が浮かんで読んだ後は、どこかすがすがしく、心が暖まった感じがした。

文学と数学がケンカせずに、まるで仲のいい夫婦のように、すばらしく混ざり合っていたし、情景描写もよかった。夏の夕方の風の描写は、実際に夕立の匂いまでしてきそうになってとてもリアルに体感できた。こんなにもいろいろな要素が混ざり合うまくとけこんでいる作品は今まで見たことがなかったし、あまり好きでなかった読書も数学も少し興味をもてた。

こんな夜更けにバナナかよ：
筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち

渡辺 一史 著

建築学科 3年

砂 野 萌

私は今回、筋ジストロフィーという難病を患った患者の一生について書かれた、『こんな夜更けにバナナかよ』という本を読みました。この本を選んだ理由はとても安易で、題名が単にリストの中で印象に残ったからでした。しかし今では本当にこの本を選んで良かったと思います。まさか、本一冊で自分をここまで見つめ直し、自分がどんな人間か、見ることが出来ると思っていませんでした。

本の内容で印象に残ったり、物凄く感銘を受けた言葉が多くあるのですが、最も心に残っているのが、『『ボランティア心理について話題になったとき、誰かが本の一節かなにかを引用して教えてくれたことがあるんです。『一人の不幸な人間は、もう一人の不幸な人間を見つけて幸せになる。』って言葉なんですけど…この言葉の意味、わかります？』』という文章です。この文を読んだとき、自分の中の汚い部分が浮き上がってくるような感じで、心に大きく罪悪感が生まれました。一見、重度の障害を持つ障害者のボランティアをすることは、すごい、とか、かっこいい、とかそんな風に見えるけれど、どこかで自分はこの人みたいに体が不自由なわけではない、だから、この人に比べたら自分なんて全然いい方じゃないか、と思って、へこんでいた自分を、自分で励ましていたのではないかと、思ったのです。私は、障害を持つ人のボランティアはしたことはありませんが、一度老人ホームの手伝いでボランティア活動をしたことがあります。そのとき私は中学生で、友人関係で悩んでいた時期でした。ボランティアに行くことによって自分を正当化し、友だちとうまくいっていないだけで、ここにいるお年寄りのように歩けなくなった、とか、ご飯が一人で食べられない、とかそんな不自由は無いですか、と思っていたのを覚えています。本の文章の意味の重さが、すごく分かる気がして、自分は、自分自身を励ますためなんかでボランティアに参加し

ていたのです。心の弱い部分を、自分より不幸な人を見ることによって消そうとしていたのかも知れません。

筋ジストロフィーと闘う主人公である鹿野靖明さんは、重度の症状が出ているのにもかかわらず、施設に入ることを拒み、自分でボランティアを募り、両親とボランティア、数名の看護師と協力しながら生活をしていました。私が重要だと思ったのは、障害を持っているから施設に入って、限られた生活しかしてはいけない、という固定観念を覆して自宅で生活することもそうですが、もっと重要なのが、ボランティアたちに助けてもらう、のではなく、ボランティアと共に、生きていこうという考えを鹿野さんが貫いている、ということだと思いました。日本語としては大した差はないかもしれませんが、ここではとても重要な意味を持っているのです。ボランティアたちや、もちろん鹿野さん本人も、障害、というものをハンデとしてとらず、鹿野靖明という人格の一部として見ていたのだと思います。こんな風に、普通の人ならハンデだと思ってしまうところを、自分という人間を構成するのにかげがえのないものだと思うことは容易なことではないと思います。私のような人間は、それこそ自分は駄目だなあ、と思うところばかりで、プラスの方向に考えることさえ出来ていなかったのです。しかし、この本のおかげで、自分が駄目だと思うところを素直に駄目なんだ、と受け入れ、しかしその部分を嫌いにならずに、まあこれも自分という人間の一部分なんだ、と思えるようになったと思います。鹿野さんの生き方を見て、生きるということがどんなに素晴らしいことか、初めて本当に伝わってきました。遠回りしても、毎日毎日必死に生きなければならないと思いました。

進化する紙メディア

赤羽紀久生 著

機械工学科5年

菅原喬史



近年、インターネットのような新しいメディアの台頭もあり、“紙メディア（特に新聞・雑誌）”は売り上げが落ち始め、元気がないと言われる。若者の中には、インターネットを主な情報源として利用しているため、新聞を購読していない人も多いという。また、無料のフリーペーパー（求人・不動産情報誌など）が登場し、新しい形の紙メディアとして勢いづいている。『進化する紙メディア』では、現在の紙メディアの構造的な問題点を指摘し、改革を求める一方で、紙メディアには大きな可能性が今なお秘められていると述べられている。

ところで、“元気がない”と言われる新聞や雑誌は、テレビやラジオ、映画と並ぶ、マスコミュニケーション（※）の代表格である。本書では、「今の社会の状況を見る限り、個人のためにそれぞれ最適化された情報が重視され、マスコミは解体される」と述べられている。好みや趣味が個人で大きく異なる現代では、不特定多数の人（大衆）を対象にするマスコミの情報は、無駄が多く、魅力がないと判断されつつあるというのだ。

マスコミは、本当に解体されてしまうのだろうか。

私は、マスコミの影響力が現在より失われても、その存在や価値がなくなることはないと考える。

たしかにマスコミが伝える情報は、私たちにとって必要のない内容もあり、また、インターネットの方が、必要な情報をタイムリーに集めやすい。また、新聞や雑誌のような有料情報よりも、フリーペーパーの無料情報に魅力をより感じる人もいるだろう。しかしマスコミは、社会の出来事を大衆に伝える報道機関であり、私たちにとって普遍的な情報も多く伝えている。

例えば、新聞（一般紙）は、単に社会の出来事を伝えるのではなく、取材を元に掘り下げた内容の記事を掲載している。日本の各地域から、世界にわたる幅広い範囲の情報を一度に得ることができ、我々が教養を高めるのにはもってこいだ。自分に興味のある情報ばかりを閲覧しがちであるインターネットや、記事内容があるテーマで絞られたフリーペーパーでは、新聞のような情報の集め方は難しいだろう。

また個人向けの情報を重視する新しいメディアは、我々に“情報選びのプロ”になるように要求しているような気がしてならない。必要な情報をうまく選ぶことができない人は、現代社会から爪弾きにされ、“情報難民”になる可能性もある。そういった状況を引き起こさないためにも、従来のマスコミの役割も欠かせないはずだ。

新聞を毎日読んでいれば、ノーベル賞を獲った人とも対等に話せる、という小泉首相（当時）の談話を紹介した新聞記事を読んだことがある。この記事を読んだとき、マスコミをうまく利用し、長い政権運営を続けている小泉氏らしい言葉であると思った。今改めて考えると、新聞のメディアとしての実力の高さを象徴する言葉でもあった。

各マスメディアは、筆者が述べるように「個人のために最適化された情報」を重視し、将来に向けた生き残りのための改革を進めていこう。しかし、“マス（大衆）”を対象とするメディアとしての役割を完全に取っ払ってしまうほどの変貌を遂げてしまうとは、私には到底思えないのだ。

ただ少し気になるのは、近年マスコミ関係者の不祥事が増えていることだ。信頼を失ってしまえば、マスコミの存在意義を本当に問われることになる。

※マスコミュニケーション：

新聞・雑誌・ラジオ・テレビジョン・映画などの媒体（マスメディア）を通じて行われる大衆への大規模な情報伝達。大衆伝達。マスコミ。（『広辞苑』（岩波書店）より）

留学生が紹介する外国の図書館

私の国の図書館を
紹介します

環境都市工学科3年

トゥラシット トウン



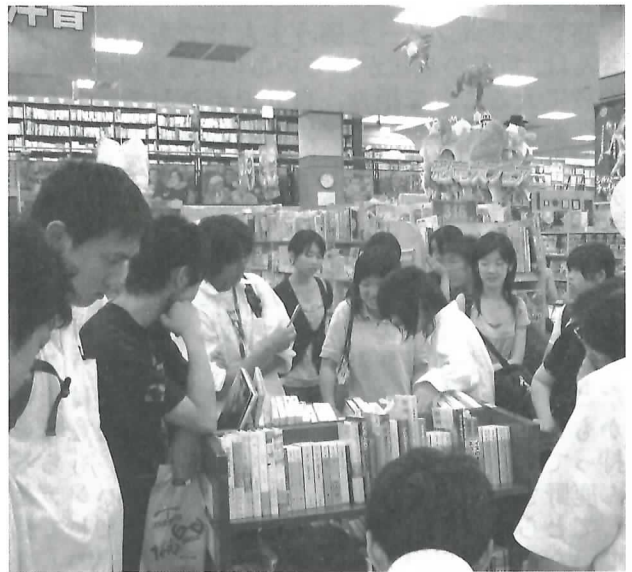
私の出身はラオスの首都ビエンチャンではなく、ラオスの北の方で中国との国境がある場所である。そこは図書館があまりないが、学校の近くに図書館のように本を読んだり、借りたりする場所がある。私はよく読みに行っていた。

私は高校を卒業してから、ラオスの首都ビエンチャンにある国立大学（National University of Laos）へ行ったのである。ビエンチャンでは図書館がたくさんあるが、私はこの大学の図書館しか入らなかったで、今回この図書館を紹介したいと思う。

ラオスの図書館は日本の図書館ほど便利ではないが利用している人にとっては十分だと思う。ラオスの大学の図書館は大きくて三階建てである。一階は事務所で、新聞を読む場所があり、利用する人のかばんや荷物を預かる場所がある。利用する前にはカードを作らなければならない。そのカードの有効期限は一年間である。そして、図書館内はかばん持ちこみ禁止となっている。学生は図書館に入る前に授業のときのように制服を着ることになっているのである。一般的な本は二階にあり、専門的な本は三階にある。二階には本を探すためのパソコンがあり、外国の本がたくさんある。本棚は真ん中にある長いテーブルを囲んでおり、言語によって分かれている。三階は専門的な本が並んでおり、外国の教科書もたくさんある。ラオスの教科書はほとんど外国の教科書から訳し、まだ足りない部分もあるので外国の教科書がたくさんある。そしてパソコン室も三階にあり、インターネットにアクセスすることもできる。

私はラオスの国立大学に通っている間によく図書館を利用した。図書館にある本は授業に関する本だけでなく、世界について勉強する本やおもしろい本や雑誌などもあるので、私はいろんなことを勉強したいときいつも図書館へ行くのである。ストレスを感じたときはおもしろい本を読み、リラックスする。

ブックハンティング



ブックハンティングについて

文化委員長 建築学科4年 出口美里

図書室に学生が選んだ本があることをご存知だろうか？呉高専には年に一度、学生が図書の本を直接選ぶブックハンティングという行事がある。各クラスから一人ずつ参加し、今年はソレイユ内の本屋へ行き本を選んだ。本の内容は小説、伝記、専門書など様々だ。予算は一人一万円で普段ちゅうちょしてしまうような値段の専門書も買うことができる。自分が読みたかった本はもちろん、みんなに読んでもらいたいお勧めの本を図書室に入れることもでき、本好きの学生には非常に嬉しい行事である。

ブックハンティングの参加者は各クラス一人なので、参加できない学生は参加する学生に欲しい本を頼んでみて欲しい。そうすればより多くの人の意見が反映された幅広い種類の本を図書室に入れることができる。またブックハンティングでは予算内で本を選ぶ。図書室にある本と重複した場合は購入されないの、事前にチェックすることをお勧めする。時間も限られているので欲しい本の題名と作者くらいはあらかじめ調べておくとも良いかもしれない。

ブックハンティングはまだ行われた回数も少なく、参加人数も限られるためか学生にあまり浸透していない。図書の本を直接選べる良い機会なのにもったいないと思う。以上のことを参考にしてもらい、より多くの人にブックハンティングを活用してもらいたいと思う。

新任教職員の随想（1）

「伝記」を
読んでみよう

一般科目（社会）

奥平 理

本を読んで
いますか？

一般科目（物理）

笠井 聖二



私はわりによく文庫本を読む。特に歴史小説や経済小説には強く惹かれる。歴史小説では「人物史」がおもしろい。歴史上の偉人たちが、どのような生い立ちで、どのように歴史に名を残していったのかを知ると、ちょっと賢くなったように思うから不思議である。また、経済小説では「伝記物」の作品がおもしろい。例えば、第二次世界大戦後の高度経済成長を支えた企業のトップは、一体どんな人間だったのかを知ると、自分もがんばらなくちゃ！という気分になれるから不思議である。

人物史では、織田信長や豊臣秀吉、徳川家康などのいわゆる「天下取り組」もおもしろいが、私は敢えて、毛利元就や山内豊信、伊達政宗などのいわゆる「天下取りまであと一步組」の方をお勧めする。というのも、あと一步組を読むと、天下取り組との関わりでその後を生きざるを得なくなる、彼ら一族の壮絶な生き様などに触れることができるからである。伝記物では、例えば「松下幸之助（PANASONIC創業者）」や「本田宗一郎（HONDA創業者）」、「井深 大（SONY創業者）」らの伝記物をお勧めする。というのも、彼らの伝記物を読むと、わが国の産業界、とりわけ「モノづくり」で成功を取めた人の生き方や仕事への取り組み方、そして彼らの人なりに触れることができるからである。

自らの人生をうまく形づくったり、よい方向に膨らませたりしたい時には、読書を通じて、他の人の歴史、すなわち「伝記」に触れることが必要である。ここであげた歴史上の人たちは、学生の皆さんにもよく知られた人々である。皆さんには、ぜひ彼らの歴史に触れてみて欲しいと思う。そして、自分のなかの何かがちょっと豊かになることを実感してもらえたら幸いである。

私の答えはどうだろうか。残念ながら「いいえ」である。最近、本当に本を読んでいない。

昔は、それなりに本を読んでいた。中学の時は、ジュール・ヴェルヌ作の「15少年漂流記」を何度も読んだ。子供だけの無人島生活を、自分だったらどうするのだろうと思いつつ読んでいたに違いない。星新一氏のショート・ショートにはまったこともある。メロンを、ぶどうの房のごとくたくさんの実をつけるように改良したら、ぶどう一粒の大きさのメロンがひとつだけできたという話を覚えている。これは、なぜか自分の中で教訓となっている。大学時代は、新田次郎氏の本を読んだ。「孤高の人」の主人公加藤文太郎氏のように、黙々と山を歩くことに憧れたこともある。今でも「歩くのが速いですね」と言われることがあるが、その名残であろう。また、開高健氏の「オーパ」シリーズも楽しかった。生き生きとした文と写真が心に残る。大学院のころは、新幹線の中で赤川次郎氏の本をよく読んだ。今まで読んだことのないジャンルで、新鮮であり、テンポがよく無心に読めたのだろう。外国のミステリなどを読んだのも唯一この時代だけだったと思う。いつしか、さりげない文で綴った男女の物語に浸っていた。森瑤子さんの「アイランド」がそのきっかけだったような気がする。七夕の話をモチーフにした設定の面白さとπウォーターという言葉が印象に残っている。吉本ばななさんや宮本輝氏を読んだのも同じ頃ではなかったろうか。

こう考えると、それぞれの時代で、ある本に出会い、無意識に心が望む本を巡っていたのかもしれない。なぜ、今、本を読んでいないのだろうか。ためしに、本屋で小説を買ってみた。そこで、小説を買うのに臆病になっていることに気がついた。それでも、本を買ってみたが、未だに読んでいない。私にとって、今は、本を読まない時なのかもしれない。振り返ったときに、この時期を思い出す本や作家がいないのは寂しいが、また、いつか、何かのきっかけで本を読み始めることだろう。それを楽しみにしている。

苦手だった読書

機械工学科

林 和彦



子供の頃、自分は読書が苦手であった。苦手と言うより、嫌いであったかもしれない。そのため読書と言ったら、夏休みに読書感想文を書くために、推薦図書を嫌々読む程度だった。読書の何が苦手であったのか。それは、文字を一つ一つ目で追っていき、単語の意味を考え、書かれている内容を理解する作業が、億劫であったからだと思う。年齢が上がるに連れて読書に対する苦手意識はなくなっていったが、それでも分厚い本を手にする今でも身構えてしまうのは、この時の読書嫌いの後遺症だろうか。

言い訳ではないが、文字を読むと言う行為は、そもそも人間にとって高度な作業ではないだろうか。文字は言葉の世界を記号化したものである。言葉を習得していなければ、文字を扱うことはできない。言葉は人間だけが持っている高度な道具であるので、言葉を前提に成立している文字は言葉以上に高度な道具であると考えることができる。この高度な道具である文字を少年期に一気に学ぶのであるから、相当な労力と時間を文字の習得に注ぎ込むことになる。その文字の学習にストレスを感じて、読書が嫌いになるのもやむを得ないと思えるのは自分だけであろうか。

しかし、文字には、その習得にかかる時間と労力以上の価値がある。文明の発展と文化の繁栄が、文字による情報の伝達と蓄積によるところが大きいことは疑う余地はない。そのため人類は文字を何世代にも渡って伝承し、知識と伝統を継承してきた。日本の場合、その営みは千年以上にも及ぶ。日本の文字を習得するという事は、千年以上に及ぶ日本の知識と伝統を自らに取り組むことである。文字を読み解く読書と言う作業は、千年以上に及ぶ日本人の英知に触れる崇高な行為と言っても過言ではあるまい。読書ができるということに対して、先人達に感謝せねばなるまい。

子供時代の読書嫌いを思い出しながら、読書の尊さについて考えさせられた。

読書の勧め

電気情報工学科

山田正史



読書の効用については、ここで私があらためて説明して勧めなくても、皆さん十分にわかっているでしょうが、これまでの自分自身の反省も込めてひとこと述べたいと思います。

私は若い頃、実はあまり読書をする習慣がありませんでした。それでも気に入った作家の小説などは、気まぐれに読み始めると、休みもせず、食事も取らず、寝るのも惜しんで読み終わるまで読み続けるのがふつうでした。しかし、このような読書スタイルは学生時代ならいざ知らず、就職して仕事で頭が一杯になる頃には、毎日の生活のリズムの中で続けられるはずもなく、次第に本から遠ざかることになりました。それに代わり、テレビや新聞などの一方的に押し寄せてくる情報で満足する日々が多くなりました。数年間そうやって過ごした後、高専に着任し、教育、研究に取り組むことになると、今度は難しい専門書や論文が相手となって仕事として読むようになると、楽しみながら読むのとは程遠い状況になりました。

そうこうしているうちに、仕事でパソコンに向かう時間が多いいせいか、気がつけば厄年を過ぎた頃から視力の衰えを感じ始め、現在ではめがねが手放せず、長時間活字を読むのもつらくなってしまいました。振り返ってみると、もっと本を通して色々な世界を見知ることが出来たかも知れないし、それによってもっと豊かな心を持てたのかもしれない。わずかな余暇をその場の享樂ではなく、本を読む時間にまわせなかったことをいまとなって悔やんでいます。私の場合、生来のものぐさな性分がいけないのですが、ずいぶんと損をしたなと感じています。

図書館には、そこにはそれぞれの本が持つ、無限ともいえる世界が広がっています。本を借りるのにお金は掛からないけれど、得られるものはお金では買えないと思います。また、年を重ねるのはあつという間です。読書に限ったことではないですが、やるべきことは出来るときにやらないと後悔することになるでしょう。

在外研究員報告

外国の図書館紹介

電気情報工学科講師 井上浩孝

バーミンガムは産業革命が始まった都市で、イギリスの中央部に位置し、ロンドンとリバプールの中間にあります。産業革命時代、石炭を運搬するために整備された運河は、再開発の進んだ近代的な建造物と見事に調和しています。インド系移民が多く、バーミンガム発祥のカレー料理、「バルチ」が名物料理です。

バーミンガム大学はバーミンガムの中心部から南西約4キロのところのところに位置する総合大学です。大学中央に、大きな時計台が建っています。図書館は、その時計台の北側にある広場の向かい側にあります。この広場は、芝生がよく整備されており、気候の良い6月の試験期間中には芝生に座って多くの学生達が試験勉強をしていました。外で試験勉強をする光景は日本ではあまり見かけませんので、とても印象的でした。図書館に入ると、受付があり、学生証を認証装置にかざすことでゲートが開き、入館できるようになっています。図書館には、250万冊の本が収納されています。

図書館の開館時間は、学期中が月曜日から木曜日までが8時30分から22時30分、金曜日が8時30分から19時まで、土曜日、日曜日が10時から18時まで、春・夏・冬休み中は月曜日から金曜日までが9時から19時まで、土曜日が10時から14時まで、日曜日が閉館となっています。学生への図書の貸し出しは1ヶ月間となっています。

図書館の設備は、図書の検索用のPC端末やワイヤレスネットワーク室、図書のセルフサービス貸出・返却装置があり、非常に充実しています。学期中、セルフサービス貸出・返却装置の前には多くの学生達が一列にならぶのですが、これを英



▲ バーミンガム大学中央図書館

語で queue (キュー) と呼んでおり、イギリスでは郵便局やスーパーマーケットのレジなどで、一列にならぶ習慣があります。私の専門の情報工学に、データ構造とアルゴリズムという分野があり、その中に、キューという1列に並んだ順番に処理するデータ構造があるのですが、まさにここから来ているのだと実感しました。

大学では、講義の課題として、レポートの提出をする必要があります。そのためには、関連する専門書を読んでレポートをまとめなければなりません。効率良く本を探すために、インフォメーションサービスという機関があり、インターネットで欲しい本を照会してリストアップしておけば、本の貸し出し状況を調べ、貸し出し可能であれば、カウンターで受け取ることができます。また、貸し出し延長もインターネットを使って申請することができます。

図書館はこの中央図書館以外に、各学部・研究機関に関連図書を収納している合計13の図書館が点在しています。特筆すべきは、シェークスピア研究所にある図書館で、シェークスピアの故郷のストラットフォード・アポン・エーボンにあります。



▲ セルフサービスの図書貸出・返却装置



▲ 1階の情報工学関係図書のフロア

新任教職員の随想（2）

40年前の 高専時代の読書

建築学科
寺岡 勝



入学当初の私は、勉強をする習慣が無く、また読書などは暇人のすることと思っていた。しかし、同級生と話すうちに私自身が余りに読書体験が無く、話について行けずに何度か惨めな思いをした。それを契機に、クラブ活動（最初は柔道、後はサッカー）の合間をみては、徐々に明治・大正期の日本文学を読み、楽しみ始めていた。

何の拍子か、図書室で下村寅太郎著の「西田幾多郎」を読んでから、哲学（思想）と文学の狭間に興味を持ち始め、京都学派の人たち、阿部次郎、和辻哲郎などの著書を読み始めた。丁度その頃世界の名著が中央公論から出版され始め、第一回配本のニーチェから徐々に読み始めたが、容易には理解出来なくて多くは解説を読むに止まった（今でも多くは理解していない）。読んだ内容について、同級生や、当時の広瀬先生（米文学専攻）、澄田先生（ギリシャ哲学専攻）、谷田先生（中国古代史専攻）などに話を聞いて頂き（先生達にはさぞかし迷惑であったことと思う）、いろいろなことを教わる他に、新たな本の紹介をして頂いた。お金が無いときに、津田左右吉の「文学に現はれたる我が国民思想の研究」は図書費で、またジョン・フォン・ノイマンの「量子力学の数学的基礎」は増本先生（物性物理専攻）の研究費で、それぞれ買って頂いて読んだ。

少し背伸びをし、遠い昔の異国の状況を想像しながら、また文化・思想・芸術・建築などの連関性を辿りながら読んでいくうちに、ギリシャや西洋の思想と中国古代の諸子百家の思想にアナロジーのあること、西洋の思想を理解するには基督教の考え方および古典主義と浪漫主義の関係の把握が必要であることなどに気が付いたときは、密かに喜びを感じた。老子・荘子・プラトン・ニーチェ・西田幾多郎などの思想からは強烈な印象・慰めを受け、またトルストイとドストエフスキイの小説、「万葉集」、漱石の「こころ」、倉田百三の「出家とその弟子」、井上靖の「天平の甍」などからは言うに言えない影響を受け、更に伊藤整の「小説の認識」、モームの「The Summing Up」などからは小説・思想の捉え方について多くを学んだ。

読書のすすめ

建築学科
西宮 善幸



「さまざまな本」

さまざまな本があります。最近では、マンガも読書本の一部として扱われております。？
軽く読むことのできる本もあれば、何日も考えながら読む本もあります。

「目的」

仕事や勉強のために読むこともあれば、時間つぶしの場合もあります。
また楽しむ為のものであったりもします。
本を読む目的もさまざまです。

「疑似体験」

自分が住む世界とまったく異なる世界で生きていくことができます。
登場人物に共感しながらであったり、またある時は異論を唱えながら、実体験以上に価値あるぞくぞくする疑似体験をすることができます。

「時間」

通勤・通学の時間に多くの人々と同居しながら読む時があれば、自分だけのものとして充実した時間として読書をする場合。
また、寝る前に読むといった〈睡眠薬〉代わりの一風変わった読書。

またまたそのことがきっかけとして、読み出した本が意外と面白く、あっと言う間に読み通し、朝になってしまい、時間が経つのを忘れてしまった。

「今日から」

- ・本を手にとって見てください。どの様な本でも良いです。
- ・読む機会をつくって下さい。どの様なきっかけでも良いです。
- ・わくわくするような夢の世界を体験してみてください。あなたを待っています。すぐそこにあります。
- ・面白い、惹きつけられる、読んでいて楽しい、苦しいけれどやめられない、その様な本（読書）を見つけてください。本を読み終えた後の満ち足りた気持ち、充実感、豊かさを味わってみてください。

行事報告

充実した
図書館ライフを

建築学科
大和義昭



私が呉高専に来て四ヶ月経ちました。図書館に度々足を運んでいます。本校の図書館には学生があまりいませんね（試験期間中以外は）。私が行くときだけですか？静かで結構なのですが、机と椅子がたくさん並びガランとした様子はまるで家具屋さんようです。これはいけませんよ。

今は著作権切れの本がインターネットで読めるし、欲しい本をパソコンで日本いや世界中からでも買えます。読みたい本が決まっていれば図書館に行かなくてもいいわけです。でも、読みたい本をどうやって見つけますか？テレビの情報？友達の話？それもいいのですが、皆が流行の同じ本しか読まないようになってしまいそうですね。自分で探して見つける楽しさもなくなりそうです。

私の専門は建築の環境という分野なのですが、この分野においては名著といわれ既に絶版になってしまった本4冊を本校図書館の書庫で見つけました。本の名前は内緒ですが、これらの本は今やインターネットの古本屋でも入手困難です。探せば別の本もありそうです。こんな体験ができるのも実際に多くの本を手にとれる図書館だからこそです。ですから皆さん、もっと充実した図書館ライフを。

最後に本の紹介を。中坊公平著の「金ではなく鉄として」です。某新聞の連載記事をまとめた本です。著者を知っている人もいるのでは？日弁連会長まで努めた元弁護士で、瀬戸内海の豊島の産廃問題や住宅金融専門会社（住専）の不良債権処理に中心となって携わった人です。すごい経歴の持ち主なのですが、この本にはこの人の数々の失敗談が書かれています。失敗から学ぶことも大切であることとか友人の有り難さとかについても気付けてくれる一冊だと思います。ちなみに、これは私がなにか失敗をしたときに思い出す本です。私よりもっとずっと若い学生の皆さんにこそ、どうぞ。本校の図書館で手に取って読めます。

第4回呉高専文化セミナー

平成18年6月17日（土）、大和ミュージアムで、図書館主催による第4回呉高専文化セミナーが開かれ、多くの方々が来場されました。

今回の講師は、呉高専教授の宇根俊範先生。歴史の専門家で、吹奏楽部の顧問でもあります。今日の題目は、宇根先生にふさわしく「音楽で語る歴史」。

外国人の日本語表記の問題（「ローズベルトか ルーズベルトか」「ザビエルかサビエルか」など）から始まり、ゴジラのテーマ音楽を作曲した伊福部昭（いふくべあきら）、ゴジラの誕生した理由などまで。

そして、伊福部昭の教え子である芥川也寸志・黛敏郎、黛敏郎作曲の「スポーツ行進曲」（NTVスポーツのテーマ）から、芥川、黛と「三人の会」を作っていた團伊玖磨作曲の「オリンピック開会序曲」へ。

オリンピック関連でベルリンオリンピックや、ヒトラーがワーグナーを愛好していた話。ベルリンオリンピックで、日本代表としてマラソンで金メダルの孫基禎が、ソウルオリンピックで聖火ランナーとして登場した時の話、などなど。

流された曲もワーグナーの曲から、1970年のヒット曲「走れコウタロー」や坂本龍一の「ラストエンペラー」までと時代や種類も多岐に渡りました。

来聴された方々は、宇根先生の該博な知識と熟練した語りを堪能されたのではないのでしょうか。

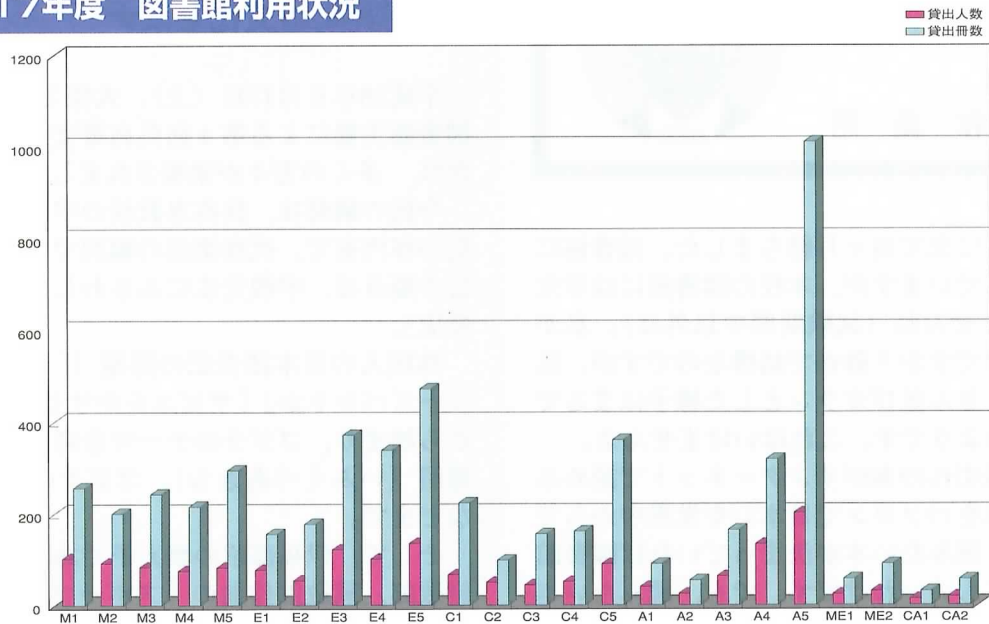
（図書館長補 新美 哲彦）



▲ 講演時の一コマ

お知らせ

1. 平成17年度 図書館利用状況



学科学年	M1	M2	M3	M4	M5	E1	E2	E3	E4	E5	C1	C2	C3	C4	C5	A1	A2	A3	A4	A5	専機電	専建設		
貸出人数	102	92	83	75	82	77	54	121	101	135	66	50	44	51	90	40	25	63	133	201	24	31	14	19
貸出冊数	256	200	242	215	294	155	177	371	338	472	223	98	155	161	360	90	54	164	318	1010	57	90	31	56

2. 学年末休業中の長期貸出について

以下のとおり、長期貸出を行ないますので、ご利用ください。

貸出中の図書は、継続手続き（1回だけ可）を行なえば、長期貸出の扱いとなります。

	1年生～4年生	専攻科1年
貸出期間	2月16日(金)～ 3月20日(火)	2月7日(水)～ 3月20日(火)
貸出冊数	5冊以内（雑誌は除く）	
返却期限	4月6日(金) 厳守	

3. 新コーナー設置について

2006年10月から「シラバス掲載参考書」及び「呉高専教員の執筆著書」のコーナーを図書館閲覧室中央に新設いたしましたので、ご利用ください。

なお、これらのコーナーは今後さらに充実させていく予定にしております。



編集後記

私の読書量は決して多くありませんが、本屋に行くのは好きです。広島の方に出れば必ず紀伊国屋かジュンク堂といった本屋に行きますし、出張先でも大きな本屋があれば立ち寄りたります。仕事柄、専門書のチェックが主な目的ですが、ぶらぶらと本棚の間を巡るだけの時もあります。ただあの知的な雰囲気が好きなだけかもしれません。そういえば、大学在学中は大学図書館に良く行きました。やはり読書というよりは、本棚の間をぶらぶらしているという方が多かったような気がします。

普段あまり本を読まないと言書は堅苦しいものですが、何となく本屋や図書館に行って、何となく本を手にとってみてはいかがでしょうか？意外と面白い本に巡り合う場合が多いですよ。呉高専の図書館は平日20:00まで開館しています。何となくお立ち寄りください。（図書館長補 堀口 至）